



TITLE:

モンゴル語の母音に関する総合的研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

植田, 尚樹

CITATION:

植田, 尚樹. モンゴル語の母音に関する総合的研究. 京都大学, 2018, 博士 (文学)

ISSUE DATE:

2018-03-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20837>

RIGHT:

京都大学	博士（文学）	氏名	植田 尚樹
論文題目	モンゴル語の母音に関する総合的研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本稿は、モンゴル語の母音に関する諸現象を取り上げ、その相互関係にも目を向けつつ、音声実験を基盤とした音韻論的な分析を行うものである。</p> <p>本研究の対象となる言語は、モンゴル語の中でもモンゴル国で広く話されるハルハ方言である。モンゴル語ハルハ方言の母音に関する現象、具体的には母音体系、母音調和、プロソディーについて多角的に分析する。</p> <p>本研究の出発点として、Svantesson et al. によるThe Phonology of Mongolian(2005)の存在が挙げられる。この研究は、本研究と同じくモンゴル語ハルハ方言を対象とし、実験音声学的手法を軸にモンゴル語の音韻について体系的に論じたものであり、非常に価値が高い。しかし、その分析が全てそのまま受け入れられるわけではなく、整合性を求めるあまり音声事実を軽視している部分や、分析が不十分である点もいくつかある。本研究はそのようなトピックのうち母音に関係する部分に焦点を絞り、批判的に検討する。</p> <p>本研究の特色として、以下の3つの点が挙げられる。1点目は、母音に関する現象を網羅的に扱うとともに、1つの現象を多角的に検証するという意味で、モンゴル語の母音に関する「総合的研究」を行う点である。それぞれの現象についての詳細な検討はもちろんだが、現象の相互関係にも注目することで、より広い視野を持って当該現象の分析を行う。</p> <p>2点目は、「借用語音韻論」の考え方をを用いる点である。借用語のデータを積極的に活用することで、本来語からはわからない音韻構造を明らかにする。</p> <p>そして3点目は、理論的な整合性のみを追い求めるのではなく、音声実験による音声事実の記述を基盤とした音韻論的分析を行う点である。詳細な実験音声学的調査を行った上で、そのデータに基づき、より妥当性の高い音韻分析を提示することが、本研究の目的である。</p> <p>第1章で上記のような本研究の基本方針と本稿の構成について述べたのち、第2～4章では母音体系について考察する。Svantesson et al. (2005) は母音体系について、「第2音節以降では母音の長短の対立がなく、音素的母音と（音素的でない）挿入母音の区別だけがある」「第2音節以降の音素的母音は短い母音である」と述べている。これに対し、第2章では複数の音声実験（音声産出実験および知覚実験）の結果を示し、第2音節以降の音素的母音の持続時間について考察する。そして、以下の5つの根拠により、第2音節以降の音素的母音は本質的には短母音ではなく長母音であ</p>			

り、位置による影響で音声的に短い持続時間で実現することが多いにすぎないことを主張する。

- a. 3音節語を対象にした音声産出実験によると、第2音節以降の音素的母音は、必ずしも音声的に短いわけではない。
- b. 第2音節以降の音素的母音を人為的に第1音節に移動させた場合、長い持続時間で発音される。
- c. 発話速度を遅くした場合、音素的母音の持続時間は長母音のものに近くなる。また、発話速度の変化に伴う音素的母音の持続時間の変化の様相は、短母音ではなく長母音の様相に近い。
- d. 第2音節以降の二重母音は、第1音節の二重母音よりも持続時間が短い。この振る舞いはちょうど、第2音節以降の音素的母音と第1音節の長母音の関係と同じである。この事実を説明するために1モーラの二重母音を認めるよりも、音素的母音も二重母音も2モーラであると解釈の方が音韻論的に自然である。
- e. 第2音節以降の音素的母音は、知覚的にもある程度の長さを必要とする。

続いて第3章では、第2章の「第2音節以降の音素的母音は、音韻的には長母音と解釈される」という結論を踏まえ、「第2音節以降に短母音を認める必要はないのか」、言い換えれば「第2音節以降に母音の長短の対立を認める必要はないのか」という点について議論する。

ここで、借用語のデータが活用されるとともに、母音調和が母音体系を推定する手掛かりとなる。借用語の第2音節に現れ、原語でストレスを持たない母音は、母音調和の原則に従わないうえ、接尾辞の母音調和を引き起こすことから、挿入母音とは解釈できない。またこの母音は、原語でストレスを持つ母音とは持続時間が異なることから、長母音とも解釈できない。これらの事実から、この母音は短母音と解釈すべきである。

その他にも、形動詞未来形-xでは挿入母音が現れないはずの位置に母音が現れ、挿入母音が現れない名詞・形容詞とミニマルペアをなすこと、本来語の中にも挿入母音が予測される位置とは異なる位置に現れる例があることを示し、これらの現象はいずれも第2音節以降に短母音を認めれば説明できることを述べる。そして、母音体系全体の整合性の観点から、第2音節以降にも母音の長短の対立を認め、第1音節と第2音節以降に同じ体系を想定するのが自然であることを主張する。

第4章では、母音の音価について検討する。Svantesson et al. (2005) では、短母音の /e/ は /i/ に合流したと述べられているが、完全に合流してしまったのかどうかは議論の余地がある。本稿では段階的に、(i) モンゴル語に [e] は現れ得ないのか、(ii)

正書法上の <i> と <e> のミニマルペアをなす語は完全に同音異義語なのか、という2つの角度から検討する。そして、ここでも音声産出実験およびフォルマント分析を行うことで、(i) 正書法上の <e> に対応する母音の中には [e] で発音されるものが存在すること、(ii) 話者によっては正書法上の <i> と <e> のミニマルペアを /i/ と /e/ の対立として保持していることを示し、/i/ と /e/ の合流が完全には起こっていないということを明らかにする。

また、第4章では後舌母音の音声特徴および音韻解釈についても検討する。特に、Svantesson et al. (2005) において /o/ と解釈されている母音に注目し、他の母音と比較しながらフォルマント構造の分析を行う。そして、/o/ とされる母音は中舌性を持ち、/o/ とは主に舌の前後によって区別されるため、/ø/ と解釈するべきであることを述べる。

第5章では、母音調和について考察する。母音調和はモンゴル語音韻論の中心的なトピックであり、これまでも様々な研究があるが、借用語を積極的に扱った研究はほとんどない。本稿では借用語のデータを活用することで、モンゴル語の母音調和に潜む原理を明らかにする。

まずは借用語に対する接尾辞の調和に注目し、従来から母音調和に関して透明な母音だと認められていた*i*のみならず、*e*も透明な母音として働いていること、および接尾辞の調和にアクセントは関わっていないことを確認する。そして、*e*が透明であることから生じる理論的な問題について議論する。具体的には、「モンゴル語の母音調和は咽頭性 [pharyngeal] および円唇性 [round] の第2音節からのスプレッドである」という従来の解釈では*e*の透明性が説明できないことを指摘し、*e*の透明性を説明するためには、語幹内の調和と接尾辞の調和を分離する必要があることを主張する。

つぎに、借用語に対する接尾辞の母音調和の振る舞いから、*u*も透明な母音として働いており、女性母音*e*, *u*, *ø*はすべて透明な母音として機能している可能性が高いことを示す。そしてこの事実をもとに、咽頭性の調和には非対称性が見られ、有標な素性 [pharyngeal] を持つ母音（男性母音）は積極的に素性のスプレッドに参加するのに対し、素性 [pharyngeal] を持たない母音（女性母音）は母音調和に積極的には関わっていないことを主張する。これらの理論的考察は、本来語の母音調和にも適用可能であり、本来語も含めたモンゴル語の母音調和に潜む原理が借用語のデータを用いることで明らかになると言える。

また、借用語語幹内部に見られる母音調和についても考察する。具体的には、ロシア語の /u/ の受容には母音調和が関わっていること、および原語の強勢母音が母音調和を引き起こしている例があることを観察し、借用語の受容においては母音調和が共時的にも機能しているものの、それは本来語に見られる母音調和とは性質の異なるものであることを指摘する。

第6章ではプロソディーについて扱う。特に、先行研究であまり取り上げられてこ

なかった複合語や句のピッチパターンに焦点を当てる。網羅的な調査によって複合語や句のピッチパターンの原則を整理するとともに、複合語や句のピッチパターンに前部要素の音節構造や分節音の影響が見られることを指摘し、それに対する音韻論的な解釈を試みる。

まずは地名複合語を用い、モンゴル語の複合語は原則として前部要素が高く後部要素が低いHLのピッチパターンを持つが、前部要素が1音節で短母音を持つ語である場合にLHのピッチパターンが現れ得ることを確認する。次に、一般名詞の複合語を用い、複合語の構成要素間の形態統語関係および構成要素の音韻構造がピッチパターンに影響を及ぼすかどうかを観察する。そして、複合語の形態統語構造はピッチパターンとは関係がないこと、および音韻構造はピッチパターンに影響を与えていることを指摘する。具体的には、前部要素が1音節でその母音が短母音であり、かつコーダ子音のソノリティーが低い場合に、LHのピッチパターンが現れることを明らかにする。さらに、この音韻構造とピッチパターンとの関係は、句のピッチパターンにも当てはまることを述べる。

上記の観察から、複合語および句では、前部要素のコーダ子音のソノリティーがピッチパターンに大きな影響を与えていることがわかる。この点に関して音韻論的な分析を行い、モンゴル語のピッチパターンの決定には音節の重さが関わっており、CVCの音節はコーダ子音のソノリティーの程度によって重音節か軽音節かが決まる可能性があることを論じる。

第7章では各章の議論をまとめ、母音に関する総合的研究、借用語音韻論、音声実験を基盤とした音韻論という本研究の特長が、モンゴル語の母音に関する諸現象の分析にどのように活かされたかを確認する。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、現代モンゴル語の母音体系、母音調和、プロソディに関する種々の問題の解明を目指した総合的研究である。モンゴルでの現地調査および日本在住のモンゴル留学生から収集した大量の言語データを綿密に分析することによって、従来の研究にはまったく欠落していた興味深い言語事実が数多く指摘されており、これまでの研究水準を高める意義ある成果と位置づけることができる。

言語分析の方法の観点からみた本論文の特色は、以下の3点にまとめることができる。まず複数の現象を個別的に分析することに終始するのではなく、相互の関連性に注目しながら有機的に考察が進められている点。2番目に借用語のデータを積極的に活用することによって、モンゴル本来語だけの観察だけでは得られない知見を引き出そうとしている点。3番目に理論的な整合性だけを追及するのではなく、音声実験による音声事実の記述を基盤とした音韻分析を行っている点である。

以上の3つの方法論について第1章で述べた後、第2章ではSvantesson et al. (2005)において「短い母音」とされていた第2音節以降の音素的母音の長さについてさまざまな視点から検証する。そして音声実験では音素的母音が必ずしも音声的に短いといえないこと、発話速度を変えたとき音素的母音の変化の様相は短母音ではなく長母音の様相に近いことなどの根拠から、第2音節以降の音素的母音は音韻的に短いわけではなく、音声的に短い持続時間で現われるにすぎないと主張する。

第2章での主張を踏まえて、第3章では第2音節以降において母音の長短の対立はないのかという問題について論じる。そして借用語の第2音節以降に現われ、原語でストレスを持たない母音は後続する接尾辞の母音調和を引き起こすことから、2次の挿入母音とは解釈できないこと、また原語でストレスを持つ母音とは持続時間が異なることから長母音とも解釈できないことなどから、第2音節以降にも短母音が存在すると論じる。

続く第4章では母音の音価について検討する。まず短母音の/e/は/i/に合流したという一般の見方に対して、話者によっては/e/と/i/のミニマルペアを保持していること、音声実験ではeのフォルマントを示している例があることに基づいて、/e/と/i/が完全に合流しているとはいえないことを明らかにする。さらに一般に/o/とされている母音のフォルマント構造は中舌性によって特徴づけられているために、/ø/と解釈するのが妥当であると主張する。

第5章では借用語のデータを利用することによって、本来語も含めたモンゴル語の母音調和に内在する原理を明らかにしようとする。そして借用語に対する接尾辞の振る舞いから、女性母音e、u、øは母音調和に積極的に関与しない透明な母音として機能している可能性を指摘する。この事実は本来語だけの観察では決して得られないものであり、「借用語音韻論」に基づく意義ある成果とすることができる。

第6章ではプロソディ、とりわけ複合語のピッチパターンについて分析が施されている。その結果、複合語のピッチパターンは形態統語構造とは無関係であるが、音韻

構造とは密接な関係があり、前部要素が短母音を含む1音節でコーダ子音(音節末子音)のソノリティ(共鳴性)が低い場合に、LHのピッチパターンが現われることを明らかにする。

以上述べたように、本論文はモンゴル語音声学・音韻論の分野の最先端を行く研究として高く評価されるが、特に感銘を受けるのは音声データを実証的に収集する際の緻密さである。インフォーマントに調査語彙を単独で発音させるだけでなく、キャリア文に調査語彙を組み込んだかたちで読み上げさせるといった工夫、さらには直接の調査対象ではない語彙もダミーとしてキャリア文に組み込んだうえでランダムに読ませるといった工夫、これらはインフォーマントに調査目的を察知されることなく可能な限り構えのない自然な音声情報を得るためになされたものであるが、その周到な配慮は瞠目に値する。

本論文は特定の言語を対象にした音声・音韻研究にとどまらず、一般言語学の分野にも波及する内容をそなえた研究成果である。またその成果のなかには言語普遍性への寄与につながる知見も含まれている。たとえば、音韻構造がモンゴル語の複合語のピッチパターンに影響を及ぼしているという本論文の主張は、子音のソノリティの程度の違いによってピッチの高低が決定されると言い換えることができるが、声帯の緊張の度合いによって子音の強さとピッチの高低が相関することは通言語的によく知られており、たとえば東南アジアの諸言語にみられる声調発生という現象などがあげられる。また、モンゴル語のピッチパターンの決定には音節の重さが関係しているという議論のなかで、CVCという音節についてはコーダ子音のソノリティが高いものを重音節、低いものを軽音節と定義し、前者が前部要素に立つ場合ピッチはHになると指摘しているが、この現象もリトアニア語などのバルト諸語でみられるコーダの共鳴音はピッチを担いうるという現象と密接に関連する。今後論者には、モンゴル語に固有にみられる言語現象の解明のみならず、より広いコンテキストのなかにモンゴル語を据えることによって、言語の普遍的特徴の探求に立ち向かっていくことを期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。平成三十年二月十六日、調査委員四名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。